関東鉄道100周年記念

「鹿島鉄道保存車輌見学と廃線巡りの旅」を体験

予約開始2日で満席の大盛況

関東鉄道（茨城県土浦市、松上英一郎社長）のグループ会社、関鉄観光（同、鈴木篤社長）は11月27日、関東鉄道100周年記念ツアーとして「鹿島鉄道保存車輌見学と廃線巡りの旅」を催行した。茨城県の石岡～鉾田間27.2kmを結んでいた鹿島鉄道は、マイカーの普及による利用者の慢性的な減少と航空自衛隊百里基地の航空燃料輸送がタンクローリーに切り替わったことなどから、2007年4月1日に惜しまれつつ83年の歴史に幕を下ろした。鹿島鉄道には、国鉄や地方鉄道から払い下げを受けたレトロな車両が現役で走っていたこともあり鉄道ファンの間でも人気で、今回のツアーも2日で満席となるなど大盛況となった。

最初に鹿島鉄道の協力により、普段立ち入ることができない旧坂戸駅の廃線跡ウォークを体験した。旧坂戸駅では、鹿島鉄道保存会及び鉾田駅保存会が所有する当時の坂戸駅の駅名板が特別に駅に設置され、ツアー客は廃線跡を一歩一歩踏みしめながらも在りし日の思い出に浸っていた。

続いて、ほっとパーク鉾田では、KR－505、キハ601の保存車両が見学できた。外観だけでなく、車両内部も見ることができ、当時使われていた機材だけでなく、プラレール、鉄道模型なども展示され、大人も子供も楽しめる場所となっていた。

その後、昼食をはさみ、小美玉市にある鹿島鉄道記念館へと向かった。同施設は個人が自費で開設し鹿島鉄道の物品・資料の収集や車両（キハ714、KR－501、キハ431）の保存展示が鹿島鉄道保存会によって運営されており、普段は非公開だが今回特別公開された。KR－501の車内には、沿線の高校と中学校の生徒会が組織し、存続活動を行っていた。「かしてつ応援団」による鹿島鉄道へのメッセージが今も残る。ボックス席に腰をかけ、今はもう走ることがない車内の窓から外を眺め、当時の思い出に浸りながらじっと動かないツアー客もいた。

各駅の駅名板や、旧玉里駅の待合室、キロポストがそのまま記念館に移設。大量のグッズ展示もあり「もっとここにいたい」と口にする人が多かった場所だった。

次に向かったのは小川南病院（茨城県小美玉市）が運営する小規模多機能型居宅介護事業所「はるるの郷」。病院長の諸岡信裕氏が、廃線後に車両（キハ432）を自費で購入し、病院前にある「はるるの郷」敷地内に展示しており、これを見学した。

自費で車両買い取った小川南病院・諸岡院長

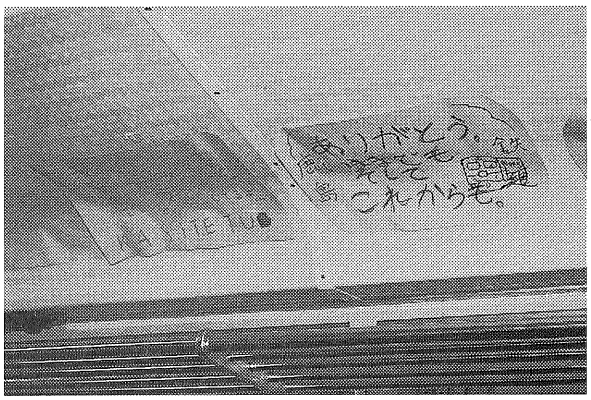
「地元の鉄道に乗って、応援して、残していかなくてはならない」

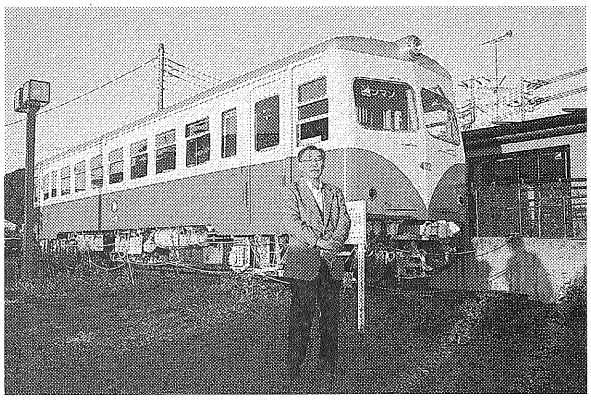
諸岡院長は「当時、地元の鹿島鉄道が廃止になるということで、何とか存続しようと茨城県知事に掛け合った。皆さんが休日に鹿島鉄道を利用し、何とか廃線を阻止しようとしてくれていたが、平日にも乗られなければ鉄道の運営が厳しいということで残念ながら廃止となってしまった。廃線になると、その沿線に住む人々の生活に多大な影響が出てしまう。とにかく地元の鉄道に乗って、応援して、残していかなければならない」と訴えた。

キハ432の車内でツアー参加者と諸岡院長が歓談。その後は小川駅に向かい、鹿島鉄道線跡地をバス専用道路として整備した「かしてつバス」（BRT）に乗車し、昔走っていた鹿島鉄道の風景を惜しみながらツアーは終了した。

今回のツアーの大好評を受けて今後も「鹿島鉄道保存車輌見学と廃線巡りの旅」は開催される予定だという。

今回特別に公開された旧坂戸駅


鹿島鉄道記念館の車内には当時の学生たちの思いが今も残る


自費で買い取ったキハ432と小川南病院の諸岡院長